

「相中相高百年史」より (昭和初期の相馬中学校 1)

ここでは、昭和のはじめから、戦争の泥沼にはまり込んでいく 1934 (昭 9) 年頃までを取り上げ、軍国主義にのめり込む教育の一端を、「相中の歴史」に見たいと思う。

1 大正デモクラシーの終焉

欧米列強から格好の獲物として狙われ、植民地化の危機を抱いていた日本も、日露戦争の勝利によってようやくその虎口を脱した。有色人種が白人に伍して列強の仲間入りをし、第一次世界大戦を通じてある程度の経済的発展も遂げ、五大国の一つとして名乗り出たのであるから、日本人の大半がその雄飛に酔い、一部の自省自戒する分子が浮き上がったのも無理はない。

事実、相中 28 回卒業の田中英昭^(※1) (元蒼龍寺住職) は『相高新聞』に連載された「相高物語」第 7 回で、往時を懐顧しつつ次のように記している。

……私は陸上と剣道を好んでやったが、第八回パリ大会、第九回アムステルダム大会とオリンピックにおける日本選手の活躍は、上昇する国運の背景と相まって、大いなる刺激となった。腰にはうす汚れた手拭をぶら下げて、寒風にうちふるえる姿ではあったが、天下の大道を闊歩し、応援歌や寮歌などを口ずさみ、青雲の夢はすごく大陸的であった。
……

明治以来の殖産興業、富国強兵策は、日清、日露の両戦争を克服するためには必要であったが、その改革が余りにも急激であったため、その矛盾もまた急速に露呈した。特に外国との交流によって流れ込んだ自由主義思想やロシア革命等の影響が、すべての世相分野に浸透し、普選運動や米騒動、労働争議、学生の思想運動などとなって現れた。

『県教育史』によれば、昭和 3 年 2 月 11 日 (紀元節の日)、福島師範学校の生徒がレーニン祭を行ったことが問題になり、首謀者の生徒が退学、責任を問われた学校長、首席教諭、舎監、主任などがそれぞれ転出させられていることが記されている。

中央から離れていた相馬中学においても、このようなマルキシズムの現象がみられたのであるから、新思想に対する青少年の関心は全体としてかなりの数にのぼったのであろう。天皇制国家としては、ここに根本的な危機感を持ち、教育の制度や内容の一大転換をはかることになった。要するに、大正デモクラシーの名を借りて、『改造』『革命』『革新』『唯物論』などの左翼雑誌にかぶれる連中を矯正し、すべての自由主義思想を、ナショナリズムに収束することを画策することであった。

……

……

学校教育への公権力介入と同時に、国民意識の統一のために、しばしば共産主義弾圧がこれ見よがしに行われた。1928（昭3）3月15日には、共産党の大検挙が行われ、全国の被検挙者は1,600名にのぼったのである。

……

1932（昭7）年10月には、文部次官通達により各県知事を通じて各中学校長に、「勅語奉読式舉行方の件」なるものが伝達された。

…（略）…毎年聖勅渙発の当日たる十月三十日をして、各学校に於て勅語奉読式を挙行し、教育に関する勅語については、職員並びに生徒児童参集の上、学校長が勅語を奉読し、且つこれに関する訓話を行い、又教育者に対し下し賜りたる勅語については、職員合同の上、学校長より勅語を奉読し、相共に覚悟を新たにしよう……。」

このように、左傾化した学生や職員ばかりでなく、一般学生や教職員に対する思想統制も、日を逐うて厳しくなっていた。定められた内容を、定められた方法で、そこから一步の前進や後退も認められずに、教育し教育されるシステムは、「見ざる聞かざる言わざる」の三猿を養成すると同じで、真の学問に対する興味や関心を喚起するものではなかったのである。有事の際にすぐ体制内の勢力として駆使できる素材、ロボットのように指令どおり動ける構造物を、必死で育成すると言っても過言ではなかったのである。

（※1）中村出身

（1月22日 転記 村山）